

な考方も現れている。<sup>72)</sup> それは社会構造と思考の間の相関関係はただ未開形態について妥当するだけだという見方である。デュルケームはこうして時間の中に未開的思維の社会学と集会的（司祭、民衆、学者）主体の作用の社会学とを結びつけているのである。<sup>73)</sup> ところがデュルケームは「宗教生活」の序章の中で知識または認識の社会的条件から彼が知識の社会学的理論とよぶものへの変化を示している。それは範疇の問題が一挙に知識社会学の中心問題として扱われれることを意味している。デュルケームはあらゆる範疇（カントやアムランなどが説明してきた）はすでに宗教的思想の中に存在していることを証明し、ついで宗教が社会的物であることを明らかにする。そこから、三段論法によって、範疇が社会の所産であるとの結果が生じてくる。その結果知識社会学にとって重要ではあるが疑問のある領域が開かれてくるのである。それは範疇が知識のあらゆる領域で機能を学んできたし、同時に思想を構成するものであるから、範疇は社会が一つの社会の表現であることを意味する。だから、範疇の一体性を想定することは、同時に社会の一体性および知識の一体性を想定することであり、同時それは知識学を知識の理論と変えてしまうことである。しかし知識学の対象がこのようなものとする、その最も重要な対象は宗教から生じて哲学的あるいは科学的知識に転化した一定数の観念を扱うもので、その社会的起源を探求する研究的なものではなくなる。デュルケームはモースやユベールの研究を基にして時間の範疇について次のように説明している。「われわれが時間の接続と範疇を研究するようになったのは時間が個人的感覚を表現するものではなく集会的思考を表現するものだからであり、集会的思考が個人的感覚や人びとの心象と相違するためである。時間の範疇を表現しているのは集団に共通な全体的時間つまり社会的時間

であるからである」。<sup>74)</sup> そこでデュルケームの「宗教生活」における範疇の扱いはモースとの共同著作「分類の未開形態」やエルツの研究<sup>75)</sup>などの成果を総合したものである。この範疇の社会的起源についての総合は形態学に直接関係する起源と宗教的集合意識に直接に関係する起源を統一しようとしたものである。<sup>76)</sup> 結局総合が行われたのは空間的分類や宗教における聖俗の二分法に表現される本源的な感情の先天性の考え方であり、感情の先天性が宗教的な集合意識の分類体系と社会形態学の本源的起源であるからなのである。ただ「宗教生活」の中には多くの考え方が含まれていて、この第一の総合の外にもう一つの総合が存在していると見られる。それは感情的先天性と集会的悟性の同一性の考え方である。そして範疇の全体は二つの統合化つまり同時的統合化と通時的統合化の二つを可能にし、保証しているのである。<sup>77)</sup> デュルケームはこの点について、「われわれが考えるように範疇もまた表象であるとすれば、範疇は何よりも集合体の状態を表わしているのである」<sup>78)</sup> とのべている。デュルケームにとっては一方に構造が集合表象と集会的悟性の創造の起源にあるのだが、つぎに歴史という通時的契機がはたらくと考えられている。つまり、集合表象は空間的にだけではなく時間的にも拡がりを見せる巨大な人類の協力の所産であることになる。だからそこには極めて単純な、住民の想像的な作用によってつくられた観念だけでなく、何世紀もの歴史を通じて学者がつくりあげてきた思考の用具としての概念も含まれてくるのである。デュルケームはこの歴史の経過における蓄積を *sédimentation* という語で表わしている。<sup>79)</sup> つまり知識資本の形成が示唆されている。だから、「それ故にこそ範疇を用具と比較することは正当であり、用具という観念と範疇および制度の三つの観念の間には類縁の関係が存在する」<sup>80)</sup> のである。故に人類の歴史の一部

72) *Ibid.*73) *Ibid.*, (p. 65)

74) p. 66

75) Hertz, 'Prééminence de la main droite', *Revue philosophique*, 190776) G. Namer, *op. cit.*, p. 6777) *Ibid.*

78) 「宗教生活」 p. 16

79) *Op. cit.*, p. 68

80) デュルケーム, 「宗教生活」 p. 22